

学校における教師の生活世界

— 解釈的アプローチの吟味を通して —

蓮尾直美 (九大・研究生)

1. 問題の設定

これまで教育社会学の分野では、教師や教職に関する研究は、教師の社会的地位、教職の専門職性、ならびに教員団体の機能を中心に、かなり活発に進められてきている。しかし、これらの研究は巨視的な観点と方法によって教師および教職の客観的理解をめざす規範的アプローチを基調とするものであり、教師が学校で日常的に営む役割遂行の過程に踏み込んで、相互作用の観点からその様態をダイナミックに把握する観点と方法を欠落させていたといわねばならない。それは、固有の下位文化を保持する教師集団、あるいは教職の世界に接近する実証研究が、困難な作業であることに起因するところが大きいと思われる。

近年、こうした規範的アプローチによる、上述の研究とならんで、象徴的相互作用論、エスノメソドロジー、あるいは現象学的社会学などの解釈的アプローチによって、教師の日常的な教育的営為を行為者の見地から内面的に把握しようとする、新しい教師および教職の研究が進められつつある。しかしながら、これらの研究についても、その理論枠組や概念構成の曖昧であるばかりでなく、解釈手順上の不備も少なからず見い出される。

そこで本稿では、教師の日常的な役割遂行の過程を内面的に把握する「生活世界」(lifelworld)の概念を用い、既存の解釈的方法による研究手順の吟味を通して、役割遂行の過程からみた教師研究を本来の社会学的理解にまで到達させるために、方法論を中心に検討を加えることにしたい。

2. 研究の視点と枠組

研究対象である教師に接近するとき、研究者は自己のカテゴリーを先験的に課すのではなく、教師が実際に保持する日常的知識を、どのように自明視しているかという見地から、「価値自由」の立場にもとづき、教師を内面的に理解するように努めなければならない。

しかしながら、こうした理解はあくまでも科学の前提としての理解にとどまるものであって、本来の社会学的理解にまで至っていない。というのは、教師は個人的な関心に関連する、「関連性の体系」(relevance system)を背景として、学校の教育活動に携わっているために、学校の全体構造に位置づけ、客観的な意味連関のもとに自らを把握することが、きわめて困難だからである。そこで、前科学的理解によって得られた行為者(教師)の主観的な意味連関の世界を、さらに客観的な意味連関をもって把握するための、確かな方法手順と洞察力が研究者に要請されるわけである。

教師が学校内で日常的に役割を遂行する生活世界は、学校長や教頭を含む同僚教師、生徒、およびその両親との相互作用のなかで展開されている。この場合、教師にとって主たる関心事は、まず学級・教科指導を通じた生徒との相互作用である。教室における教授・指導上の権限を制度的に付与されている教師は、生徒との相互作用場面で、その役割達成をめざして状況を定義づけるが、生徒による独自の状況定義に直面して、役割の修正を余儀なくされ、状況の再定義を試みつつダイナミックな交渉関係を営む。

このように、教師は当初生徒の指導を中心と

する生活世界を保持しているが、その経験領域の拡大と深化につれて、教師にとっての意味ある他者は、生徒よりも同僚教師や生徒の両親であるという認識に至る。その結果として、教師は学校組織における自己の地位と役割に対する解釈を深め、その責任と自覚にもとづく生活世界を構築することになる。

このような視点と枠組により、以下、既存の研究事例に即して、解釈手順を具体的に吟味していきたいと思う。

3. 考察

(1) 教師-生徒関係

ここでは、オ一に授業を通して構成される教師と生徒の現実世界を、「かくれたカリキュラム」の視点から分析した調査研究、オニに進路決定のために、教師、生徒およびその両親との三者面談に、エスノメソドロジーの立場から接近した調査、オ三に教師のユーモアやニックネームを、教師と生徒の関係における象徴的表現として、実証的に取扱った研究について、それぞれ考察を加える。

まずオ一の研究では、①「かくれたカリキュラム」に関連する一連の概念構成が曖昧であること、②必ずしも相互作用の視点が明確でない質問紙項目の結果にもとづいて、授業場面での教師と生徒のリアリティを確定していること、③解釈の妥当性を他の手法による証左によって吟味していないことなどがあげられる。

オニの研究では、①受験体制をあらかじめ「問題」状況として設定し、また教師をそのでの選別の担い手とみなす前提が置かれていること、②録音テープによる調査技法を中心としているために、三者面談における状況は、必然的に限界性を有していること、③収録された会話の状況を三者の生活世界との関連で把握する解釈手順が十分に試みられていないことがあげられる。

オ三の研究から、教室における象徴的意味

の表現としてのユーモアやニックネームの事象を通して、教師が制度上の役割から離れて人間としての教師自身を見出しうる生活世界が明らかに示される。

(2) 教師-同僚関係

教師が一人前の教師として役割に習熟し、社会化を遂げていく過程を学校組織論の立場から接近した実証的研究について考察を加える。ここでは、オ一に新任以来、学級・教科指導を中心として展開する教師の生活世界が、様々の葛藤に直面しながらも、教職経験を通して解釈を豊富にするために、学校を運営する中堅教師としての自覚やアイデンティティを有する生活世界へと大きな変容を遂げること、オニに、このような教師のリアリティは、質問紙法ばかりでなく、面接法や事例研究法などの手法により、多角的に裏づけられた証左にもとづいて得られるものである。

(3) 教師-生徒の両親関係

教師と生徒の両親が、学校における日常的な教育活動に対して、それぞれ抱いている役割認知の共通性と差異性に着目した調査研究について考察する。その結果として、オ一に教師は生徒の両親が平常の教育活動において受験準備のための指導を希望するとみなしているのに対して、実際には両親は教師と同様に、生徒の個性や能力に応じた教育を重視していること、オニに、しかし、教師は現実には両親による暗黙の期待を察知して、受験をめざした準備教育に力を注いでいること、が明らかとなった。

4. まとめ

以上のように、学校における教師の生活世界は、従来、進められてきた巨視的な観念と方法によるだけではその内在的把握が困難である。教師自身の見地にしたがって解釈的方法によつて、教師研究は本来の社会学的理解にまで発展させることが可能となる。この場合、研究の理論枠組の精緻化とともに、解釈手順を不断に吟味する手続きが、一層重要視されねばならない。